

源氏物語におけるあの世の匂い

—— 薫と大君との交際をめぐつて ——

黄 建 香

一 はじめに

「匂い」が源氏物語において多彩な役割を果たしていることは周知の事実である。臭覚文化がなければ王朝貴族生活の華やかさも生まれていないといってもいいぐらいである。古人にとって匂いは身に付けなければならないものであり、古人の気質、人柄、階級を代表していたものでもある。これらの匂いは貴族階級の物質生活の一部になったばかりでなく、ある意味では、人々の精神生活をコントロールしていたとも言える。いうまでもなく、源氏物語のところに描写される匂いは全体の基調を構成し、特に宇治十帖において、クローズアップされ、一つ一つの巻の主題を完成するのにかげがえのない役割を担っている。物語の通常の公式的な匂いや薫りは三田村雅子氏や尾崎佐永子氏らにより全般的な研究がされており、ここでは省略することにするが、様々な匂い、更にそれらの様々な関係の中で、あの世に繋がるものが特に注目される。当時仏教が深

く人々の生活に根づいており、おのずとあの世の匂いが必要としたのだろう。きつと物語の読者はみんなわたくしと同じ疑問を抱えているにちがいない。それはどうして薫が大君と結婚できなかったのか、またなぜ、中君は匂宮の妻になってしまい、浮舟も薫を選ぶことができなかった、匂宮との三角関係という道を辿ってしまったのか。本論では、主に総角巻の名香などを中心として、薫と大君の交際をめぐつて検討してみたい。また、方法論の角度から文学作品に於けるあの世の匂いの機能を探ってみたい。

二 名香の香と密の薫

A 仏のおはする中の戸を開けて、御燈明の灯けざやかにかけさせて、簾に屏風をそへてぞおはする。外にも大殿油まゐらす。(総角巻5・二二三)

B 心にくきほなる灯影に、御髪のコぼれかかりたるを搔きやりつつ見たまへば、人の御けはひ、思ふやうに、かをりをか

しげなり。(同二二四)

C
かく心細くあさましき御住み処に、すいたらむ人は障りどころあるまじげなるを、我ならで尋ね来る人もあらましかば、さてややみなまし、いかに口惜しきわざならましと、来し方の心のやすらひさへ、あやふくおぼえたまへど、言ふかひなくうし、と思ひて泣きたまふ御気色のいといとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむ、と思ひわたる。(同二二五)

D
御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ臥したまへり。名香のいとかうばしく匂ひて、櫛のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる御心にてわづらはしく、墨染のいまさらに、をりふし心焦られしたるやうにあはあはしく、思ひそめしに違ふべければ、かかる忌なからむほどに、この御心にも、さりともししたわみたまひなむなど、せめてのどかに思ひなしたまふ。(傍線筆者、同二二六)

右は総角巻の冒頭に薫と大君の交際に関するいくつかの場面である。Aは、薫が八の宮の一周忌の準備のため宇治を訪れた夜泊まる決意をし、その真意を言い伝えられた大君の一連の行動である。御簾の外で待っている薫は中の事情を全く知らないままに自分なりの計画を抱え込んで待機する。橋姫巻に「仏の御隔てに、障子ばかりを隔ててぞおはすべかめる」(橋姫巻5・一二五)とあるように姫君た

ちの寢室は仏間との境に襖だけを隔てにしていたことが分かる。父宮が亡くなってからその仏間は、代わりに姫君の持仏を置くようになっていた。即ち、姫君の部屋は仏間に隣接している。ここでは御燈明が中心道具となっている。常識では男女の逢瀬の部屋はほのかなる灯が相応しいけれど、大君は薫との対面を承知しながら仏間の御燈明を明るくかき立て、犯してはならぬとの姿勢を見せる。それに、御簾の「外にも大殿油まゐらす」(総角巻5・二二三)が、薫に止められる。薫は姫君がいる中が明るすぎるのを察し、暫く堪えて、時機を待っていたが、「仏の御燈火もかかぐる人もなし」(同巻5・二二三)を機に東側から「屏風をやを押し開けて」(同巻二二四)御簾の中に入ってしまったら、そこで、始めて仏間が開いているのに気付き、大君は母屋の西面にある仏間に移ろうとし、「なからばかり入」(同巻二二四)ついているところである。女の上半身だけが仏間に入っている絶妙な位置付けなので、薫は仏間の戸を閉めようもない。

Bでは、女の髪を搔きやりながら顔をあらわに見るのは男女が契る直前の行為である。CはBのすぐ次におこった薫の心理描写である。大君の美貌に感動すると同時に、自分以外に漁色家が姫君を尋ねて来たらと心配する薫の矛盾した内話である。冷静な性格とは異なり、極めて慌てているところが今までとは変わった薫の内面を際立たせる。BとCによると、今夜大君と逢わなければならぬ薫の決意が充分に暗示されている。その次に起きたのは即ち問題とされるDの場面である

薫は仏への気兼ねをしながら低い几帳を仏の御方との隔てに置き、大君に寄り添って横たわる。すると、突然に部屋一杯に名香と櫛の匂いが鼻につき、すぐ次に、薫は匂いから大君の深い信仰心や仏への不敬に思い及び、自分の無分別の行為を後悔するにいたる。よって、語らいだけで夜を明かしてしまう結末になった。

ここには二種類の対比関係がしつらえられた。一つは二人のお互いに対する態度である。大君は薫の真情を拒み、仏堂までも護身の守りにしたいほど、なやなよとした女身と対照的に磐石以上に動揺し得ないたたかさをあらわす。それは重厚な部屋の雰囲気と人の態度なのである。服喪中或いは仏堂の前では男女の契りは忌むべきことだから、万が一薫が闖入しても仏堂の入り口に横たわれれば、勝手気ままなことはしかねないだろうという計算である。大君は物語においてまれにある結婚を「拒む」タイプの女であるから、薫の泊まる意向に反対はしなかったが、一方、あの手この手と母屋に入るのを断る彼女の甚だ矛盾した気持ちが見える。これらによつて、大君はわざと仏堂の入り口で薫と顔を合わせる場面を想定したとしか考えられない。逆に、薫の立場から見ればどうなるうか。たびたび真心を訴えたが一回も認めてもらえなかった。にもかかわらず、拒まれれば拒まれるほど思いはつのる。宮中は薫の縁組みのために最高級の姫君を選定しているのに、本人は大君でなければ結婚しない態度を示す。服喪中と言っても、そろそろ喪明けだから今結婚しても非難されることもないものの、仏前では男女のことは忌むべきだ

と大君は考えているとしても、あいだをもので隔てれば障りも消えるのではないか、など薫はいろいろと思いをめぐらす。

もう一つは几帳と匂いの対比関係である。几帳は空間的には人間と仏の間を仕切り、この世とあの世が仕切られることになる。すると、薫はやつと安心して恋人に寄り添って横になる。しかし、不思議なことに、その途端に仏堂から名香と櫛の薫りが漂い満ちてきた。香気がはばかるところなく隔離をなくし、二つの世界を再び一つに繋ぎ、即時に薫の道心と呼び戻した。彼は自分の無謀さを責められた思いで、すぐに大君と契ろうとする考えを放棄した。結局二人は一つ部屋の中で顔を合わせて世間話をするだけで過ごした。ここでは几帳という具体的事物と抽象的な匂いの厳しさの中で、道心が俗心を克服したといえる。物語の結果から見ると、大君は積極的な行動を通じて薫を説得できたし、薫に対する態度が薫の疑いをおのずと解消させた。薫が山に泊まることを同意しながら、閨房の外で足を止めさせることは、全く大君がしかけておいた理想的な結果である。薫がわざと几帳を移動する姿が重々しく感じられるが、几帳は人の心を動かすことができないので、強い匂いに比べて、几帳はいかにも取るに足らないものようである。

また、ここでは大君の一連の行動と薫のそれを比較する必要がある。大君は仏を頼りに拒絶の姿勢を作る。仏間の戸を開け、御燈火をかき立て、簾に屏風を添えるというように、大君は周到に防備する。それと知らぬ薫は御燈火が暗くなるのを待ち、屏風を押し開け、

御簾の中に入ってしまう。珍しい逢瀬の情景である。「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬこと」(総角巻5・二二九)との薫の言葉によると、今夜は二人にとっては始めての逢瀬であることが分かる。この初夜は大君にとっては対面と言うよりも対戦といったほうが相応しいのである。前後を関連させて見ると、大君は計画的に母屋の西面にある仏間をたてにとったと考えられる。恐らく仏間より他に身の安全を保障する場所はないのかもしれない。大君は、かたくなに男女の情に流されない態度を一貫して示している。

名香は仏に奉る香で、密は仏前に供する香木である。これらのゆらゆらと立ち昇る香りが仏まで届く。この場面では薫が示した仏への遠慮が窺える。従って、この匂いは普通のもものと違い、仏の匂いであり、あの世のものと理解したほうがよいであろう。すなわち、匂いは人間と仏を対話させる媒介物なのである。そして、すぐ後に「峰の嵐も籬の虫も心細げにのみ聞」(総角巻5・二二六)こえてくると、筆が秋の夜の風情に推移し、男のやきもきする心が静まってくる様が語られている。仏の匂いには鎮静剤の効きめが現れていることがうかがえる描写である。

もちろん仏間には名香などは今からではなくずっと前から焚かれているわけで、匂いも今に限って匂うこともないはずである。薫が御簾から入る前に名香の「かうばし」い匂いと密の「はなやか」な薫りを感じたはずなのに、物語ではこの場この刻のものと設定されている。宇治十帖は男と女をはじめとしてあらゆる人間を救済する

ことを第一主題として、そのためにいろいろな手法を用いて救おうとする。切口として作者がいきなり設けた重量級の試練に薫が耐えられるには仏の匂い以外の何物もない。薫の現世への執着と現世からの離脱という二つの思惑を同時に志向させようとする設定のもとで物語が展開するためには、現世の執着から引き戻せるものは何よりも仏の力であろう。道心のステッカーを貼り付けられた薫はどこに行こうとしても、それを基準に宇治三姉妹との間に、大君とはもちろん、中の君とも浮舟とも距離を保つ交誼をする。

名香は総角巻の冒頭で「名香の糸ひき乱りて、『かくても経ぬる』など、うち語らひたまふほどなりけり」という形で紹介されており、八の宮の一周忌の準備に自然と必要とされて登場するが、後の逢瀬のための伏線にもなっている。名香は物語の幾つかの箇所³に描かれており、濃厚な香ばしい匂いであることが窺える。

若紫巻において、源氏が北山の僧都の坊を訪れる場面に「そらだきものいと心にくくかをり出で、名香の香など匂ひ満ちたるに、君の御追風いことなれば」(若紫巻1・二八五)とあり、これは光源氏の衣服に薫きしめた香を部屋の名香の香と比較する描写である。賢木巻では、「風はげしう吹きふぶきて、御簾の内の匂ひ、いとも深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり」(賢木巻2・二二四)というふう⁴に、出家した藤壺のところの匂いを訪れた光源氏の君の御衣の匂いと競い合わせて描く光景である。また、鈴虫巻では、女三の宮の持仏開眼供養を催す場面に、「名香には唐の百歩の衣香を焚きたま

へり。(中略) 關伽の具は、例のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて、荷葉の方を合はせたる名香、蜜をかくしほほろげて焚き匂はしたる、ひとつかをりに匂ひあひていとなつかし」

(括弧筆者、鈴虫巻4・三六二)と濃やかに語られている。以上の用例のように、名香をほかの匂いと比べるのではなく、総角巻の名香は几帳と比較されているところが特徴的だといえる。仏の匂いはこの世とあの世に跨がる唯一の橋となっているし、また生きている人と亡くなった人との間に共有するものにもなる。冥冥の中で仏の匂いが男女二人をどこまで導くかが問題となる。この万籟寂とする夜、薫が横になるとまず感じたのは、香ばしい名香の匂いと櫛の華やかな香なのである。すぐ続いて、女の仏への信仰心に思い及び、薫は「心焦られしたるやうにあはあはしく」と自責せずにはいられない。運命のせい、薫と大君とは矛盾の渦に陥ってしまう。大君は、妹の中君を薫に勧めるほど男を拒否する。薫は、中君と匂宮をとりもつほど大君を深く愛し続ける。大君は父の宮の遺言を堅く守る為、結婚しない決意をする。薫は八の宮の生前の委嘱に拘束されると同時に、姫君たちの身の上を世話しなければならない責任を持つことになっている。

仏の匂いに対する敬畏の念は薫の心底に生きている。薫は若い年にも相応しくなく、人より何倍もひたすら仏道を信仰して、宇治の山を熱心に訪れ、山の姫君に執着する。それは薫の深い仏心を示し、俗世界以外のところに憧憬していることを示唆している。長年宇治

に通い続け、俗聖の八の宮の教えを傾聴した効果でもあろうが、薫の心には宇治の山を聖地と見、宇治の姫君を仏の使者と見たにちがいないと思う。大君は女性であると同時に、女神でもある。薫の中には道心と恋心の二つが対立していた。しかし、この夜の経験が薫を精神の上で成長させ、道心と恋心とは又一貫するものになったと見られる。一方、大君は俗聖の父の宮に山奥で育てられてきたせい、か、仏の道を修業するのに青春をかけていた。見慣れ、聞き慣れたことによって若くして世の無常を悟った。薫の恋心と道心が一貫したものであると同じように、大君の純愛と結婚拒否も一貫したものである。事実、大君は最後まで自身の志に背いたことがない。

平安無事の一夜は薫に残念さや口惜しい気持ちを生じさせるどころか、却ってそれが奇跡を生んだと認めなければならない。双方が長い間論争してきた「物隔て」と「隔てなく」及び「物の隔て」と「心の隔て」との懸案は、この時点で意見の一致にまで到達した。

E 違へきこえじの心にてこそは、かうまであやしき世の例なるありさまにて、隔てなくもてなしはべれ。それを思しわかざりけるこそは、浅きこともまじりたる心地すれ。(総角巻二二

五)

F ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つづみたまふ御心の隅残らずもてなしたまはむなん。(同二二〇)
G かくほどもなき物の隔てばかりを障りどころにて、おぼつか

なく思ひつつ過ぐす心おそさの、あまりをこがましくもあるかな、(同二三)

H (大君)「隔てなきとはかかるをや言ふらむ。めづらかなるわざかな」と、あはめたまへるさまのいよいよをかしければ、

(同二二四)

I (薫) 隔てぬ心をさらに思しわかねば、聞こえ知らせむとぞかし。めづらかなりとも、いかなる方に思し寄るにかはあらむ。仏の御前にて誓言も立てはべらむ。(同二二四)

Eは大君の中に薫が占める位置を示している。大君は、「物隔て」たまま話を交わすという他人行儀に対して、自分は心広げて打ち解けていると薫に弁解する。一人の異性に面して、隔てのない付き合いをしたいと表明するのは何を意味するのか。実際、薫と八の宮の姫君たちとは兄弟・親友である関係と言える。もともと、八の宮が辞世してからは、大君とは隠すことのない、信頼し合う付き合いに発展してきた。しかし、薫にとつて大君の口から言われてやはりちよつと意外である。Fは、薫が泊る準備をするために大君の女房と交渉するところである。いつものように物越しに対面するのはつらくて、会つて話したい気持ちを先に大君の女房に打ち明けて協力してもらうのも常識通りである。Gはその晩に御簾の外に隔てられた薫の心理描写である。屏風や簾の仕切りはせつかくの顔合わせを妨げる嫌いがあるとの不満である。Hは薫が中に入るときの大君の責め言葉である。「仏の御燈火もかかぐる人も」(総角巻5・二三)い

なくなり、薫と二人きりになってしまったことに気付いた大君は奥に入ろうとした。奥というのはこの時最も安全の場所は母屋につながる仏間のほかにはない。まさかこの時に薫が入つて来るとは思いもかけなかったであろう。この時もやはり大君は薫に「隔てなき」の一言で抗議している。Iは薫のHに対する反論である。薫は自分の分け隔てない気持ちを相手に分かつてほしいという意志を表明している。薫は「隔てぬ心」と強調する。

以上を整理して行くと、薫は簾や屏風の障りがない対面を望む。けれども、大君は最後の防御ラインを取り払いたくはなく、ものが隔ても交流はできるとあくまでも固執する。言い換えれば、薫は物の隔てをはずさないと、心の通じ合いは実現しかねるといつまでも主張し、大君は普通の契りではなく、物の隔てがあつても信じ合うことができる自分の意見をすこしも曲げない。つまり、この時点で、二人は以心伝心で相手を理解する段階には到達していない。最終的には薫が望むとおりに物の仕切りを取り払ったが、事態の進展には新たな障害が置かれた。薫は姫君の墨染めの忌み服には事前

に心の用意はあつたが、仏間の戸が開いていることにはすこしも思

い及ばなかった。母屋にいるけれども、そのすぐ西にある仏間の戸

が開いていれば、仏と同じ空間にいるのと同様である。大君が望ま

ぬ無分別なことは絶対しないと「仏の御前にて誓言も」(総角巻5・

二二四)立てたが、男女の寄り添いがやはり仏に対して不敬なので、

薫は意識的に仏との間に几帳を置く。ここ(D参考)にも「さし隔て

て」と書かれている。話は太君・薫・仏と三者の關係へ急展開していく。恐らく薫の第一の反応は物の隔てを置けば空間的に差支えないと思つてゐることだろう。これは太君との關係に一貫して持つていた考え方である。だが、寄り添つて横になつてみると、名香と橘の匂いが漂つてゐることに気付いた。ここでは仏の匂いは薫にとつては格別のものであつた。几帳で分け隔てられるだけで匂いを遮ることは物理的には不可能である。よつて、太君・薫・仏との三者は一体となる。薫は忠実な信仰者であつて、常に「後世のこと」に氣をかける薫は、仏が禁じることを犯すはずはない。宮中の数々の素晴らしい女性に興味を示さない薫が、険しい山路を越え、山の姫君を執拗に求めるのも仏に一步近付きたい願望が潜んでゐると言えよう。仏の匂いが、もともと自信のない薫を、太君との世間話で一晚を過ごすだけに至らせ、几帳とは比べられない作用を果たしてゐる。男女の逢瀬の場面に有形の几帳と無形の匂いを同時に機能させるのは物語作者の絶妙な発想である。事態の展開の結果から見れば、事なく夜を送つた事は太君の望みである。その結果、薫を普通の宮人と變わらない者と見てきた太君の薫に対する見方も飛躍的變化を遂げている。従つて、この一晚を経て、夜が明けるにつれて、二人の心もだんだん精神的に一致してきた。この点はこの夜の明け方に二人が分かれる直前の對話によつて分かる。

K 薫「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にも遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぎさ

まほしき」(同二二七)

L 太君「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえは、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」と答へたまふ。(同

二二八)

これは二人の、新しい關係を築いた結論である。相手がこれほどに心を堅く閉ざしてきたことに不満をこぼしてゐた薫は、やつと太君と「同じ心」を持てるようになったことを首肯するようになった。太君と直接会つて心の内をお互いに打ち解けられれば十分に満足できる嬉しさが何気なく表れてゐる。仏の匂いは物の隔てがあつても心の隔てを取り外すことができる道理を薫に教えた。一方、太君は薫を百パーセント信頼し始めた傾向が見える。薫の大胆な近付き方を許したのももともと相手を信頼してゐるからだし、さらにそのことが世間並みの男女の付き合ひではない扱いを可能にした。

太君と薫との間に、ある距離を保つてこそ心の通ひ合いが確保される。太君には、男との距離を保つことによつてはじめてかけがえない心の交流が獲得される。男女の交流がいかにして可能かという深刻な問いかけに根ざす問題なのであつた。⁴ 薫と太君のような交際は今までの世の中には有り得なかつたものである。物の隔てがあつても心の隔てがなければとの考えは二人の精神上的の強い結び付きを実現させた。太君が生きている間に薫に直接会つた経験はこの一夜だけで、世間話をするだけで終わる。實際普通のような結ばれ方でなくても二人はこのままでよいという共通認識に達した。精神結

合はこの二人にとっては理想な結末かもしれない。暁の別れに薫が「例のやうになだらかにもてなさせたまひて、ただ世に違ひたることにて、今より後も、ただ、かやうにしなさせたまひてよ。よにうしろめたき心はあらじと思せ」(総角巻5・二三八)と言うのに対して、大君は「今より後は、さればこそ、もてなしたまはむまにあらむ」(同頁)と応答する。仏の匂いが邪魔した一晚は二人にとって始めての逢瀬であるが、これほど神聖な雰囲気にとったのは、やはり仏の導きだと解釈するほかはない。仏の匂いが薫と大君のストーリーの全体にわたって、機能しているとも言えよう。薫・大君式の交際は物語全体において、環境のせい、唯一若いときから世の無常を悟ったカップルである。以後薫の、大君の形代にあたる中君と浮舟との交際を考えると、二人の友愛は本当の意味で空間と時間を越えたものと見られる。薫は後に女二の宮と結婚したが、なお落ち着かなかったのは、大君とどのような精神結合を求め続けた結果であろう。大君は物語において結婚を拒む女性の一人である。しかし、薫を心の隔てのないただ一人の男として交際している。重態になってから、「さらば、こなたに」(総角巻5・二九八)と自ら薫を枕頭に招いたこともあるし、薫が几帳の中にすこし滑り入って女の手をとらえて話し掛けることにも気を許した。中君らは「この御仲をなほもて離れたまはぬなりけり」(総角巻5・三〇七)と二人の関係を疑う。周囲の人達は二人の本当の事を知るようがないので、実事があつただと思つてゐるが、大君自身は否定しようとはしない。一方、大君

は普通並みの契りを拒否し続けた。薫が匂宮と共に山を訪れる日にこんな場面がある。

M この君(薫)は、主方に心やすくもてなしたまふものから、まだ客人居のかりそめなる方に出だし放ちたまへれば、いとからし、と思ひたまへり。恨みたまふもさすがにいとほしくて、物越しに対面したまふ。(総角巻5・二七七)

逢つた夜が確かにあつたにもかかわらず、理屈らしい理屈もなく薫を拒む。一回目の逢瀬の夜と比べる必要がある。前回、仏の存在をはっきり意識しながら、薫に対して大君は周到な措置を取る。しかし、喪服も既に着替えた今では、物越しに対面するしかない。薫の恨み言に、「なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ。あはれと思ふ人の御心も、必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ。我も人も見おとさず、心違はでやみにしがな」(総角巻5・二七八)と堅く決心をする。この内話は大君の交際の基準だとも言える。日常的男女の結合を絶対しない上に、命が止むまでに心が変わらぬ相手を求めている。大君が薫を拒絶する根本な要因はやはり仏の戒めにある。父宮が薨去してから「仏を形見に見たてまつりつつ」(椎本巻5・一八三)のように生前使用した部屋で持仏を父の形見として見ていた。父宮の遺言が大君の生活の信条であり、それによつて運命が決定されている。

N 父宮おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことな

る身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。

(権本巻5・一七六)

他方、薫は大君と逢った夜以来、大君を妻のような立場として考へて交際する姿勢を見せる。翌日世間並みに後朝の文を寄越す。「心もて「尋ばかり」の隔てにても対面しつるとや、この君も思すらむ」(総角巻三三二)と大君が想像どおりの薫で、たとえ「尋ばかり」の隔てはあつても、逢ってしまったこと事体に十分な満足を薫は覺えている。しかも、以後大君との再会を申し入れる度に相手が望まぬ事は絶対しないと保証する。これで、薫が結婚に対する見方が著しく成長している。大君との肉体的結合から精神的結合に変わるには、薫の中では激しい葛藤があつたに違いない。物越しでない話し合いが薫の最大の願ひとなつた。大君の他人行儀をあれこれ恨みながら、大君が世の無常を悟つているところが自分と相似している点に感動させられる。

○ いかなれば、いとかくしも世を思ひ離れたまふらむ、聖だちたまへりしあたりにて、常なきものに思ひ知りたまへるにや、と思すに、いとどわが心通ひておぼゆれば、さかしだち憎くもおぼえず。(総角巻5・二四二)

二つの心がびつたり合うようになったことは薫に大君への理解を更に深めさせた。貴重な共通点を見付けた薫は嬉しい気持ちまで起こる。大君こそ薫にとって合格の妻である。薫が捜し求めるのはただの妻ではなく、仏心を持つ人である。真に世の中の悩みを捨てら

れる人は男にしても女にしても何人いるであろうか。だから、大君の容貌よりも薫はその心に引かれる。愛する大君が亡くなつてから、妹の浮舟に執着するのも大君の分身と思つてゐるからである。薫は大君とも事なく一夜を過ごしたし、中君とも無事に一夜を過ごした。この二件の性質は全く違ふのである。この二件の出来事を比べる必要がある。一回目の逢瀬が過ぎ、仏を憚つて薫は翌朝山を去り、新婚三日通いの習俗を守らなかつた。喪明けの後、自由の身に戻つた大君のところへ薫は時機を逃さずに赴き、前回の続きに新しい計画を実施しようと決意する。その夜、薫の来訪を予想した大君は「いとく這ひ隠れ」(総角巻5・二四二)てしまい、いつも同じところで休む中君一人だけを残して、薫に逢わせる。大君の計画と知らぬ薫は馴々しく几帳の中に入る。

P 中納言は、独り臥したまへるを、心しけるにや、とうれしくて、心ときめきたまふに、やうやう、あらざりけりと見る。いますこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてや、おぼゆ。あさましげにあきれまどひたまへるを、げに心も知らざりける、と見ゆれば、いといとほしくもあり、また、おし返して、隠れたまへらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ(総角巻5・二四三)

薫は大君が待つてくれていると思うとうれしいが、胸のときめく状態から実情を知つたためにつらくて情けなく思われる状態に陥つてしまう。薫が中君と話しをしただけで夜通し、実事のなかつたこ

とを検討すべきである。大君の意にそつて、中君に会い、また、大君に薄情と言われぬように中君と共寝をしない。外見的にも大君と面会した世間体を作る。翌日いつものように後朝の文を送る。それに対して、返事は中君ではなく、大君自身がする。一回目の逢瀬が実質的に心の隔てのない仲になったというなら、今回は人為的に越えられぬ障害が設置されてしまった。この二回目の逢瀬を通して、二人は宿命的に現実の夫婦としては結ばれず、精神的夫婦にしかないことを疑いなく証明している。薫は懸命に現実へ、大君は必死に理想へと完全に食い違ふ道に走ったから、この段階では前回で達した同じ心の関係は崩壊した。しかし、仏の匂いの導きが実事が及ばなかったと断言はしない。二人がこれからそれぞれどんな行動を取るか、どんな計画を立てようとしているかには関係なく、背後に一回目の逢瀬の状況が関わりを持っている。

大君がそのあと妹の中君を薫にと決意する。これは中君も薫も思ひも掛けない発想である。

Q (大君) 同じことに思ひなしたまへかし。身を分けたる、心の中はみな譲りて、見たてまつらむ心地なむすべき。(総角巻

5・三三八)

右は弁を通して薫に伝える大君の決意である。中君は自分の分身であるので、代わりに薫の妻にさせたいのである。大君の場合は、軒端萩を光源氏に残して逃げ出してしまう空蟬の場合とは明らかに違う。物語にわたって、大君にだけ与えられた「譲り」の美德はや

や冷酷な彼女に柔和な色取りをし、新タイプの女性像を付与されたと同時に、宇治十帖の重要な方法となる「形代」の方法もここが原点となっている。

薫が大君にじかに会った機会は三回しかない。一回目は仏の匂いの邪魔で話すだけで一夜を送った。二回目は大君の重態の最期に二人は手をとらえて話し合った。最後は大君が亡くなってからその死顔を心行くまで見つめる場面である。

総角巻では薫と大君、匂宮と中君の交際が並行して進行しているが、後者の具体的場面はほとんど書かれておらず、前者の毎回の対面に、主人(中の君を含み)の居場所、客人の居場所、女房らの居場所、中間にある道具、部屋の灯火などを細かく描かれている。匂いを含むこれらの小道具は人物の人物・性格・心理を緻密に浮き彫りにしている。二人の愛情は肉体的結合によらぬ成長を遂げている。ここでの匂いは薫と仏との間にある絆でもあれば、薫と大君との絆にもなっている。それはあの世からの名香の香と密の薫のように華やかで、高尚な芳香ではないだろうか。

大君は強い死の願望通りに父のいる世に去った。中の君と匂宮の恋を見てきたために、中の君本人よりも苦悶するゆえに、愛に対する恐懼に耐えられず唯一の選択肢である「死」を選ぶ。大君は具体的にどんな病気だったのか、物語には一切描かれていない。おそらく死の構想は一番簡単な、物語を進行させる方法かもしれない。桐壺更衣が圧迫され死にいたり、それから柏木が罪を恐れて死を選ぶ

ことと類似する。死の方法は源氏物語のもう一つの創作方式であり、見逃すことはできない。意志を決める身体を去らせ、不変の魂を残す語り方は大君に桐壺更衣及び柏木との大きな違いを与えた。浮舟も薫と匂宮との愛の付き纏いの中でとうとう息苦しい隙間のない板ばさみから脱出しようと決意して、死を選ぶしかなかった。大君の場合のように浮舟も自由の死を憧れた。けれども、作者は最後のヒロインを見捨てることができず、女を今までのように犠牲にすることはできなく、むしろ同情し、救おうと努め、ここで救済の主題を完結したとみられる。死を選んだ人物の中で浮舟を単純な動機でその人を救済するとは考えられず、大君の形代だからこそ、彼女の精神のしたたかさの永続を浮舟に代用させたのである。

入水して助けられ、浮舟に再度己が人生を考えさせようとする⁽⁶⁾。

大君以降のヒロインはもはや男の所有物ではなくなり、始めて完全に自分のすべてを決める権利が付与され、男子社会からの自由が与えられた。薫が都で時めく第一級の貴公子であるのに対して、大君は没落親王の遺児でしかないという、その世俗でのあり方はほとんど無視⁽⁷⁾されていると指摘されているとおりに、薫と宇治の姫君らは完全に対等化されている。光源氏物語の叙述とはあきらかに食い違ふ。物語の時代では、基本的に階級の厳しい男子社会に生きる人々は光源氏のようにランクに不似合いの恋をしたら、容疑なく傷つけられるのは女のほうに決まっている。ほとんど都を放置した宇治の叙述は新たな男女人物像を設計することによって、一夫多妻の背景

のもとで一夫一妻の幡を揚げるモデルが誕生しえた。新奇をてらう近代性を象る変化はすでに具現しているのではないか。女は人格独立の人間となつて、当然觀念の面だけでも男と同地位の座に据えられ、だから、茫々たる人の海に女を象徴する「浮舟」は決して転覆しないと断言できる。

宇治十帖の物語は、(このように)觀念的に方向づけられた薫が、宇治の大君・中の君・浮舟などに恋着していくことで展開していくが、彼が大君に親交を求めることは、道心という一面をいよいよ強調することでもあつた⁽⁸⁾。宇治十帖の作者は薫に、大君・中の君・浮舟とともに結合不可能の交誼をさせた主題は、今日まで主題論と方法論の両方から多くの優れた論文に論じられている。薫という人物ははじめから、物語展開の要請として現世離脱の理想を觀念的に賦与されていたものとみられる。これはおそらく、光源氏の物語の、切実な救済の課題を受け継ぐ存在として造型されているのではないか。

光源氏物語は光源氏を叙述すると同じように、宇治十帖は薫という男を描く続編なのである。正編までの光源氏の栄達が語られるのとは対照的に、女人らのありとあらゆる苦悩が深く掘り下げられたに対して、続編は女の生の問題が考え直されながら、男の世界に対してバリエーションを求めることから始めて女の救済が考えられ、また苦しみ始めた男の心理をも語ることに、男と女というこの世に共存する二種類の高等動物にとって、最理想の交際は一体何

であるかという斬新な課題が提出される。「現実への執着と現実からの離脱」という矛盾に生きているとの評価は、薫に対する総合的な評言であると言えるわけであるが、都にある薫は普通の貴公子のように嫡室を抱えているし、都にいる限り、他の上流貴族と大した違いはないであろう。にもかかわらず、宇治の姫君に執着するという、都以外のところで安らぎを求めたかったが、とうとう叶えられなかったのである。光源氏が明石で遂げた大成功と相反して、薫の宇治における物語が進行すればするほど、逆に都世界というものが浮上してくる。

三 おわりに

薫の独特な体臭に合わせて、宇治十帖では抽象的な匂いは重要な効果を發揮している。とりわけ、あの世に繋がるものが異臭の薫りを身につける薫と関わってかけがえのない機能を担う。続編で描かれる人々は男と女の問題ではなく、人間と人間の普通の交際を実現し、女性に奥深い母屋から出るところに作者の近代性、超現実性がありありと窺がえる。男女の間に起こる純粋な交際は光源氏の場合にはまったくありえなかった。光源氏はかつて自分の妻になった女としか交際しない。ある程度仏扱いされた薫に光源氏と截然とした違いの男女関係を要請した作者の意図のもとで、薫・大君型の親交が完璧に近い形で構想されたのである。

名香の香も嵯の薫りもみな仏の匂いである。仏を供養するための

匂いが、必要によっては人物の個性を表したり、物語の展開の鍵となったりする作用を担っている。祈りや厄除の媒介物となるところに重点をおかず、匂いが人物の細かい行動と心理を緊密に結び付け、彼らの深層心理を明らかにするという。源氏物語における一つの論理が見えてくるようである。もとより、源氏物語では様々な匂いが用いられているが、その中でも仏の匂いが重要な役割を果たしている。何よりも、物語の思想を理解するには避けては通れぬ問題である。仏の匂いは薫・大君らの表面の人間像から魂まで突き止められる。香ばしい仏の匂いは彼らのあるべき姿へと導く。それぞれ異なる生き方を見詰めるにより、人間共通の生き方を掴まえ得るのはやはり仏の匂いの普遍性ではないだろうか。源氏物語は多面鏡であり、色々な人生が屈折して語られているのであって、そこに生きる人物が多様な容貌と表情に屈折されるそれが源氏物語の姿であった。

注

- (1) 三田村雅子「源氏物語の感覚の論理」有精堂 一九九六年三月
- (2) 尾崎佐永子「源氏の薫り」朝日新聞社 一九九二年五月
- (3) 鈴木日出男「宇治の物語の主題」(源氏物語研究集成第二巻 源氏物語の主題 下) 風間書房 一九九九年九月
- (4) 高田祐彦「結婚拒否」(源氏物語研究集成第八巻 源氏物語における伝承の型と話型) 風間書房 二〇〇一年十月
- (5) 宇治十帖の形代については以下の多くの先行論文に研究されている

る。

- 三田村雅子「大君物語―姉妹の物語として―」(源氏物語研究集成
第二巻 源氏物語の主題 下、風間書房 一九九九年九月)、三
田村雅子「源氏物語の感覚の論理」(有精堂 一九九六年三月)、
藤井貞和『源氏物語論』(岩波書店 二〇〇〇年三月)、横井孝
「「ゆかり」の物語としての源氏物語」(「源氏物語の探究」第十
四輯、源氏物語探究会編、風間書房 一九八九年九月)、山上義
実「『源氏物語』薫の行方―宇治十帖結末に関する一解釈・再論
―」(「源氏物語の世界方法と構造の諸相」菊田茂男編 風間書房
二〇〇一年九月)、坂本共展「浮舟物語の主題」(源氏物語研究集
成第二巻 源氏物語の主題 下、風間書房 一九九九年九月)
(6) 坂本共展「浮舟物語の主題」(源氏物語研究集成第二巻 源氏物語
の主題 下) 風間書房 一九九九年九月

補注

『源氏物語』の引用は、「日本古典文学全集」(小学館、昭和五十一年
十一月)により、その頁数をも掲げた。